

Title	ラスキ「ヨーロッパ自由主義の発達」 : Harold Laski, The Rise of European Liberalism. 1936. London
Sub Title	
Author	加田, 哲二
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1937
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.31, No.2 (1937. 2) ,p.321(163)- 328(170)
JaLC DOI	10.14991/001.19370201-0163
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19370201-0163

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

二十日 暮六ツ時詰 同 断
 廿三日 明六ツ時詰 同 断
 廿六日 右同断
 廿九日 暮六ツ時詰 同 断
 壹ヶ月分メ人足百人

右之通無相違正人馬大切ニ爲相勤可申、依之一札入置申、段如件

明治元辰年九月

三田町

名主 三 太 夫
 同見習 新 一 郎
 年寄 五 郎 右 衛 門
 小前惣代 久 太 郎

品川宿は役人 衆 中
 同助郷は惣代

要するに維新當時における品川宿の混亂とその助郷村々の疲弊とは上掲の諸文献がよく説明してゐる。明治三年二月の驛遞改正を経て、陸運會社の設立となり、明治五年八月晦日を限り、諸道の傳馬所并びに助郷の諸制度は廢止された。その際品川宿における一切の貸借は如何處分されたか、現存の資料では明白にならない。唯永年に互る苛役から脱し得たことはそれ等助郷村々にとつて多大の歡喜であつたことはこれを想像するに難くない。

(昭和十二年一月二十日稿)

ラスキ「ヨーロッパ自由主義の發達」

Harold Laski, The Rise of European Liberalism. 1936. London.

加 田 哲 二

ハロルド・ラスキの「ヨーロッパ自由主義の發達」を紹介するには、多少の理由がある。それは自由主義に関する解釋が近來甚だ區々であつて、何が自由主義を意味するかさへも、明白でない状態だからである。その一二について擧げて見やう。

その第一は、ファッシズムの方面における自由主義觀である。ファッシズムは、その全體主義の立場から、共產主義、社會主義に反對するとともに、自由主義をも排撃する。而して、それはまた資本主義にも對立するが如き觀をなしてゐる。この場合ファッシズムの解釋では、自由主義は資本主義と同一概念とせられてゐる。自由主義の克服は、ファッシズムの重要な使命としてゐるが、この自由主義の克服は、彼等に從へば、同時に資本主義の克服を意味する。従つて、自由主義と資本主義との間に何等の區別を設けず、また資本主義の發展的段階において、自由主義は後退し、獨占資本主義の政策が採用せらるゝに至るといふが如き立場をファッシストは採らない。資本主義

ラスキ「ヨーロッパ自由主義の發達」

一六三 (三三一)

は何處までも自由主義と解釋し、自由主義の政治及び經濟政策が、獨占資本主義の下においても行はれてゐるとファッシストは考へてゐるのである。故に、ファッシストは一般に自由主義の「害悪」について論じ、ファッシストの政權掌握をもつて、自由主義の克服と考へてゐるのである。これは自由主義の最廣義における解釋であらう。

第二の自由主義に對する解釋は、マルクシスト、殊にコムミュニストの解釋である。コムミュニストは、プロレタリア獨裁を主張する點において、ソシヤル・デモクラシーの立場に反對してゐる。而して、このソシヤル・デモクラシーに對する反對において、コムミュニストは、この内に國家社會主義または國家資本主義的方法を認め、そこに、ソシヤル・デモクラシーと獨占資本主義との妥協を發見し、それをもつて、ソシヤル・ファシズムとしたのである。而して、自由主義を、かくの如きソシヤル・ファシズムに對する一援助者と解釋し、それが封建主義に對したやうな革新的意義または進歩性を喪失して、單なる反動の役割を現在演じてゐるに過ぎないものである。而して、獨占資本主義下における、かゝる役割の演者として、自由主義を解釋するのが、コムミュニストの立場である。

第三は、リベラリズムとリベラールとを同義語とする最も通俗的な解釋である。これは主として個人の生活に關する態度の問題である。個人的問題に對するリベラールの態度の保持者をすべてリベラリストと呼ぶのは、現在のジャーナリズムなどにおける慣習のやうである。生活態度に對する寛容性をリベラリズムと呼ぶことは、一種の解釋で、リベラリズムが宗教上における寛容(トレレエション)を主張したことと思ひ合せて、全然不都合ではないが、それはどこまでも私生活上の問題に關しての寛容であるといふ點において、これをリベラリズムと同一視することは、適切な解釋といふことは出來ぬ。

二

自由主義に對するかゝる解釋が不適當であるとすれば、自由主義の本來意義は何によつて、闡明することが出来るか。それは自由主義の歴史性の問題を深く掘り下げることによつて得らるゝのである。殊に歴史を尊重すると稱するファッシストにしても、本來の歴史的事實を無視して、主觀的解釋をそのまま客觀的事象に押し附けることは不當であらう。更らに、イデオロギーの歴史性を強調するマルクシストが、ファッシスト流の獨斷論をもつて、自由主義の解釋に臨むことは、自らの歴史的方法を放棄したのであり、一の獨善的解釋なりといはざるを得ない。

従つて、自由主義の解釋に關しては、その本來の歴史性を闡明することにあらねばならぬ。この點において、ハロルド・ラスキの「ヨーロッパ自由主義の發展」は、近來の注目すべき著述である。その構造は、次の如くである。

第一章 歴史的背景 この章においては、自由主義の擔當者たるべき階級が第十六世紀のルネッサンス、リフォーメーション時代に發生し、フランス革命時代までにその社會的・政治經濟的霸權を掌握するに至つた事情並に、かゝる歴史的作用において、基礎となつた哲學またはイデオロギーが自由主義なる所以を詳論してゐる。

第二章 第十七世紀 この世紀は、第十六世紀における自由主義の萌芽時代から更らに進んで自由主義建設の天才出現の時代である。この時代においては、前代の中世的封建制の打破は進んで、近代民族國家の成立となり、その理論家として、デカルト、ホッブス、ロック、パスカル、サイデナム、ベエイルなどの諸天才の出現があつて諸方面における自由主義の建設があつた。第十六世紀が自由主義的思想運動の勝利の見通しがついた時代であるとするならば、第十七世紀はその完全な勝利の時代である。この時代の新思想、即ちブルジョア的思想の諸様相を表式化せば次の如くである。

- a 道徳における功利主義
- b 宗教における寛容
- c 政治における立憲制度 王權の抑制者としての政黨と王權の制度(キング・ベニス・ゼ・ロウ)
- d 經濟
 - イ 商業の便益のための國家の利用
 - ロ 市場のための戦争
 - ハ 經濟的支配のための權力
 - ニ 植民地獲得のための征服
 - ホ 都會の農村に對する支配

而して、これらは知識の普及(定期刊行物の増加)教育・宗教・法律などを通じて實現されてゐる。

第三章 第十八世紀 第十八世紀は自由主義の完成の時代である。フランスにおける自由主義の發展及びその政治的表現としてのフランス革命があり、フランスは自由主義の中心地となつた。かゝる政治的自由主義に對して、イギリスは經濟的自由主義の中心地である。工業革命の進行、その前夜のイデオログとしてのアダム・スミスがある。かくて、第十八世紀は自由主義の實現の時代である。而して、この自由主義は、前代からの特徴として、所有階級の色彩を多分に持つてゐる。自由主義における自由は、所有者の自由であつて、無所有者の自由ではない。こゝに自由主義の特色がある。第十八世紀の急進的自由主義思想家の宗教に對する態度は最もよく、そのことを示すものである。彼等は一の宗教利用者であつて、この點において、土地所有と深く結びついてゐた舊傳統的勢力としての宗教との妥協を示してゐた。彼等の主張したことは、企業に對する宗教の

干渉を排したのであり、無所有者に對する慰安としての宗教を是認し、一般には宗教を私事(プライベート・マツタ)として取扱つたのであつた。かくて、この時代の自由主義は、所有者の自由主義たる本質を示してゐる。

第四章 その後の發展。第十九世紀の自由主義を論ずるのが、この章の目的ではあるが、ラスキは、第十九世紀をもつて、寧ろ自由主義に對する批判の時代としてゐる。

第一 保守主義の批判 ド・メエトル、ヘーゲル、ロマンティックの思想家、クローリツヂ、カーライル、サウシー、デイストラエリ、シスモンデイ、ユント及びその學徒の批判。

第二 社會主義の批判 サン・シモン、ロバート・オーエン、シャアル・フリーエ及びそれらの學徒、マルクス及びその學徒。

第三 社會政策の批判 社會施設國家(Social Service State)の主張者の批判であり、ドイツの社會政策論者の批判が、その重なるものであり、前掲第一に擧げた批判者のあるもの、例へば、ユントの如きはこの部類に算入するもよし。大體大戰以前までの批判である。

第四 ファッシュズムの批判

かくて、第四章を終つてゐるが、第一章 一一一八五頁、第二章 八六一一六〇頁、第三章 一六一一三三六頁、第四章 二三七一二六四頁であつて、第四章は、最も少いのである。こゝに、ラスキの自由主義の取扱方法に關する特徴があるといひ得るのである。而して、この點において、從來の自由主義の研究者が第十九世紀を自由主義の世紀としてその研究の對象とした點と最も異なるものがあり、一の主義の歴史性を研究する立場としては、この方法

は是認さるべきであらう。

三

ラスキの著書は以上のやうな構造を有するものであつて、普通の自由主義の歴史とは大きな差異がある。普通の自由主義史家は、自由主義史において、その主力を第十八・第十九世紀の兩世紀、特に第十九世紀に注ぐのが普通であるが、ラスキはこの一般に行はれてゐる方法を探らず、自由主義の根源を近代民族國家の發生時代に求めてゐるのである。この點は、彼の卓見として注意するに値する。この立場は、從來からとも行はれなかつたものではないが、ラスキによつて、特に明白にされた點である。

ラスキはヨーロッパ自由主義發達史として自由主義の取扱方法において、國別の自由主義史の方法を例へば Guido De Ruggiero, *The History of European Liberalism*. 1927. English translation by R. G. Collingwood. のやうな方法を採用せず、また多くの社會・經濟・政治思想史の研究者の採つてゐる思想家別の方法を採つてゐない。勿論この方法はラスキ特有のものではないが、ラスキの著書においては、自由主義の流れとその基礎的事實とが、よく綜合せられて、讀者をして、よく自由主義の本質を理解せしめ、且つその史的發展の本質を把握せしめるに役立つ方法においてなされてゐる。ラスキが、その著書題名 *The Rise of European Liberalism* の下で *Essay in Interpretation* としてゐるのは、その取扱方法を如實に示したものであり、且つその所期に背かぬものであるといはねばならぬ。

かくて、ラスキは、自由主義なるイデオロギーをイデオロギー自體として取扱ふ抽象的論議に陥らず、イデオロギーの基礎的事實を見逃してゐない。而して、この基礎的事實とは、資本主義的生產方法にその根源を有する社會

的關係の重要であり、殊にその著の第一章は、かゝる基礎的事實とそのイデオロギーとしての自由主義との現實的關係を七十數頁に互つて論じてゐるのである。

しかし、このことは、彼が唯物史觀の信奉者たることを示すものではない。彼は公式的唯物史觀を斥けてゐる。例へば、經濟と宗教との關係、殊に資本主義とプロテスタントとの關係において、マックス・ウェバアの說、即ちプロテスタントの倫理が資本主義經濟組織の主動動因とするが如き見解に賛同せず、寧ろタウネイとともに、その逆を主張するものではあるが、宗教の經濟に對する依存性を認めるにも拘らず、なほ宗教と經濟との相互作用を認めるが如き立場にゐるのである。彼はどこまでも、現實的な資料によつて、これらの問題を解決しやうとするものであつて、公式的論議をなすものではない。

要するに、ラスキは自由主義をその歴史の流れにおいて理解せんとするものである。既にこの一文の冒頭に論じたやうに、自由主義の勝手氣儘な解釋において、自由主義の功罪を云々するが如き態度ではない。今日は既に自由主義の時代ではない。しかし、自由主義の否定は必ずしも人間的自由の否定を意味しない。この意味において、自由を一定の立場において論じた自由主義は、その自由主義を否定するの餘り、すべての立場の人間の自由を否定せんとする傾向を生むでゐる現代において、少くとも再検討せられべき理由がある。

ラスキは、人も知るやうに、ファンクショナル・セオリー(機能學說)の主張者である。その種々な主權並に政治に關する著述において、彼はこの立場を表現してゐる。而して、このファンクショナル・セオリーは、實は自由の尊重にその基礎を置いてゐる。この點において、自由主義の祖國としてのイギリスにこの學說が發展し、ラスキ、マツクイヅァ、コールなどの一聯の機能學說論者を出したことは偶然ではないし、また自由主義の發展したところに、

その自由主義における自由の發展形態が見出されることも、また偶然ではない。而してこれらの論者が社會主義の形態における自由を主張する點も注目し得る。同じイギリスにおいて、同じ傾向のファンクショナル、セオリーを持つ論者が、他面社會主義とは、反對の分産主義(Distributism)を主張することも、われわれは注意しなければならぬ。チェスタートン、ベロックなどの主張がこれである。彼等の主張も人間生活における自由の主張であつて、自由の否定者としてのコムミニズム(廣く國家集中主義の社會主義)と獨占資本主義の表現として、同じく自由の否定者であるファッシズムに反對してゐる。この傾向は、ジョン・ラスキン、ウィリアム・モリスの創造的人生觀の系統を引くものである。それは政治的勢力としては、いまだ強力のものではない。しかし、自由の新形態の主張者として、而して、擯取なき私有財産制度の主張者として、われわれの注目を要請するものである。かくの如く、自由が種々な角度において、論究せらるゝとき、近世史における最大な役割を演じた自由主義の研究は、一層深められなければならぬ。それは没落した一のイデオロギーとして放置されてはならぬのである。それは理論上からのみではなく、現實生活の上からも然りである。ラスキの著書の如きは、この點で第一に讀まらるべきものである。

馬場敬治著『技術と社會』(第一卷)

藤 林 敬 三

著者馬場教授が先きに(昭和八年)現代經濟學全集中の一巻として『技術と經濟』の一書を公にせられ、吾國に於ける技術の社會科學的研究に多大の刺戟を與へられたことは、讀者の周知する所であらう。然かも其の後數年にして今此處に私が著者の新著『技術と社會』(第一卷)を紹介し得ることは、單に私人の欣快とする所に止まらぬであらう。

既に著者の舊著と新著との表題がこれを示してゐるやうに、新著に對する著者の觀點は擴大せられて技術と社會の關聯に移されてゐる。兩著作の主内容に従つてこれを見れば、著者の舊著は技術の哲學的研究と——寧ろ——その經營學的研究であるのに比して、その新著は技術の經濟學的研究をも包接する寧ろその社會學的研究であると見做してゐる。そしてこの後の研究は既に著者に依つて先きの著作の内に公約せられた所である。(『技術と經濟』九九頁)

著者が新に問題とする技術と社會の關聯は、著者の見解に従へば、次ぎの如く二様であると考へられてゐる。即ち、